



半田まちあるき

新美南吉の足跡をたどる

ごんぎつねのふる里で遊ぶ。

「ごんぎつね」手袋を買いに」などで知られる児童文学作家の新美南吉は、愛知県知多郡半田町(現半田市岩滑やなべ)で誕生しました。彼が学生時代から教員時代を通じて精力的に執筆した多くの童話や小説は、国語教科書に採用されるなどして、人びとに愛され続けています。庶民や子ども、身近な動物たちがいきいきと描かれた多くの作品の舞台は、ふる里の半田。登場人物たちの心情を映した美しい風景は、ここ半田のまちにある、彼の生家近くで今も見ることができます。



記念館の中で、とてもゆったり読書をしている南吉さんの実物大形。

新美南吉童話イメージキャラクター「ごん吉くん」。実は南吉さんの弟子です。

新美南吉記念館

●0569-26-4888 ●半田市岩滑西町1-10-1
●9:30~17:30 ●毎週月曜、第2火曜休
(祝日・振替休日の場合は開館、翌日休館)、
年末年始休 ●大人220円(中学生以下無料)
※令和4年11月下旬~12月は、リニューアルのため臨時休館予定

新美南吉記念館

「ごんぎつね」手袋を買いに」おじいさんのランプ」など、数々の名作の作者として知られる、半田が生んだ児童文学作家・新美南吉の記念文学館。館内には常設展示、図書閲覧室などが設けられ、自筆原稿や日記・手紙などの資料、また代表作「ごんぎつね」の世界をジオラマで見ることが出来ます。



里山の稜線を彷彿とさせる屋根の美しいシルエットが印象的。

cafe&shop「ごんの贈り物」

新美南吉記念館に併設されたcafe&shop「ごんの贈り物」では、南吉関係の絵本や書籍のほか、市内の銘菓や南吉童話グッズを取り揃えています。オリジナルコーヒーや各種デザートを楽しみながら、絵本を読むこともできます。



ごんが佇むベンチ

矢勝川のほとりにはベンチの横でごんが佇んでいる場所があります。権現山に思いを馳せているごんと並んで思い出写真などはいかがですか。



南吉の養家(新美家) ((公財)かみや美術館 分館)

生母り糸の実家。跡取りのため大正10年、当時8歳の南吉が養子として迎えられましたが、寂しさに耐えられず数ヶ月後には渡辺家へ戻りました。童話「小さい太郎の悲しみ」「川」に登場します。
●0569-29-2626(かみや美術館)

事前予約制
●半田市平和町7-60
●入場料300円



300万本の彼岸花(矢勝川堤)

9月下旬から10月上旬になると、半田市と阿久比町の境を流れる矢勝川の堤に東西1.5キロメートルにわたって彼岸花が咲き誇り、一面が真っ赤な絨毯に覆われる幻想的な光景が現れます。その数なんと300万本。これは童話「ごんぎつね」に書かれた「ひがんな花が赤い布のようにさきつついていました」という描写を再現しようとして、平成2年に地域住民が主体となって彼岸花の球根を植栽したのがはじまりです。



南吉の生家(渡辺家)

南吉は大正2年7月30日にこの家で生まれました。向かって右が父の畳屋、左が継母の下駄屋でした。幼い頃の南吉はここで行き交う人々を眺めて育ちました。
●0569-26-4888(新美南吉記念館)
●半田市岩滑中町1-83
●9:00~17:00 ●年末年始休
●入館料無料
※令和4年秋冬改修のため臨時休館予定



六地藏・南吉の墓(北谷墓地)

童話「ごんぎつね」の中でごんが隠れていた岩滑の六地藏がここに移されています。南吉の墓は、昭和35年、父の渡辺多蔵によって建てられました。



常福院

童話「ひよりげた」の舞台となったほか、「久助君の話」、小説「堀」にも登場するお寺。戦前は境内で盆踊りが行われ、南吉もよく踊っていました。



でむし広場

矢勝川沿いの小広場。でむし(カタツムリ)の像やキツネの滑り台などがあります。広場の名前は教員時代の詩集に掲載した詩にちなんでつけられました。



新美南吉記念館から繋がる「童話の森」に置かれている六地藏とごんの像。